

完訳 楊家将演義 《下巻》・目次

人物紹介

地図(◆楊家将演義 主要地図(燕雲十六州とその周辺)、◆北宋・遼・西夏)

完訳 楊家将演義 本編

北宋志伝 卷六

(宋真宗、咸平三年庚子の年から、咸平六年癸卯の年まで、凡そ四年のことを記す)

- 第二十六回 九妹女、誤って幽州に陥り 楊延徳、大いに番兵を破る
第二十七回 王枢密、計もて無佞府を傾け 謝金吾、勢いもて天波楼を毀つ
第二十八回 焦贊、怒りて謝金吾を殺し 八王、智もて楊六郎を救う
第二十九回 宋の君臣、魏州にて景を看 王全節、銅台にて兵を交う
第三十回 八王、詔を齎し六郎を求め 焦贊、大いに陳家莊を鬧す

北宋志伝 卷七

(宋真宗、景德二年乙巳の年から、大中祥符四年庚戌の年まで、凡そ六年の事を記す)

- 第三十一回 呼延贊、途中にて救いに遇い 楊六郎、大いに遼兵を破る 66
- 第三十二回 蕭太后、榜を出して兵を募り 王全節、大遼へ出征す 78
- 第三十三回 呂軍師、南天陣を敷き 楊六郎、公に三関を出る 89
- 第三十四回 宗保、神に遇いて兵法を授かり 真宗、榜を出して医人を募る 98
- 第三十五回 孟良、白驢馬を盗み走り 宗保、穆桂英と佳き遇す 111

北宋志伝 卷八

(宋真宗、大中祥符五年壬子の年から、大中祥符八年乙卯の年まで、凡そ三年の事を記す)

- 第三十六回 宗保、衆を部いて天陣を看 真宗、壇を築いて将帥を封ず 124
- 第三十七回 黄瓊女、反つて宋宮に投じ 穆桂英、陣を破りて姑を救う 134
- 第三十八回 宗保、議りて迷魂陣を攻め 五郎、蕭天左を降伏せしむ 145
- 第三十九回 宋の真宗、詔を下して師を班し 王枢密、反間を用いるを進む 155
- 第四十回 八殿下、三関に兵を借り 衆英雄、九龍に武を闘わす 165

北宋志伝 卷九

(宋真宗、大中祥符九年丙辰の年から、天禧元年丁巳の年まで、凡そ二年の事を記す)

- 第四十一回 楊五郎、糧秣を付応け 八娘子、大いに遼兵と戦う 176
- 第四十二回 楊六郎、議りて北境を取り 重陽女、大いに幽州を開す 186
- 第四十三回 大遼を平らげて南将、師を班し 官語を頒ちて、大いに功臣を封ず 196
- 第四十四回 六郎、楊業の骸を取るを議り 孟良、誤りて焦贊を殺す 206
- 第四十五回 禁宮中に八王、北斗に祈り 無佞府に六郎、寿命を終える 215

北宋志伝 卷十

(宋真宗、天禧二年戊午の年から、乾興元年壬戌の年まで、凡そ五年の事を記す)

- 第四十六回 達達国、宋を拳伐せんことを議り 楊宗保、兵もて西夏を伐つ 224
- 第四十七回 東天神、大いに宋將と戦い 白聖将、陣にて張達を斬る 233
- 第四十八回 楊宗保、金山に困陥り 周夫人、救兵せんことを力主る 245
- 第四十九回 杜娘子、大いに妖党を破り 馬賽英、火もて番營を焼く 258
- 第五十回 楊宗保、西夏を平定し 十二婦、勝を得て朝に回る 269

* * * * *

《上巻収録内容》

プロローグ 〈南北宋志伝について〉

北宋志伝 卷一

(宋太祖、開宝八年乙亥の年より、宋太宗、太平興国元年丙子の年まで、凡そ二年の事を記す)

- 第一回 北漢主、忠臣を屏逐し、呼延贊、激烈に仇を討つ
- 第二回 李建忠、力めて義士を救い、呼延贊、夢に神より武を教わる
- 第三回 金頭娘、征場にて武芸を闘わせ、高懷徳、潞州にて大いに戦う
- 第四回 和議を講じて楊業、兵を回し、鸞駕を迎えて豪傑、能を施す
- 第五回 宋の太祖、後事を遺囑し、潘仁美、計もて英雄を逐う

北宋志伝 卷二

(宋太宗、太平興国二年丁丑の年より、太平興国四年己卯の年まで、凡そ二年の事を記す)

- 第六回 潘仁美、詔を奉じて召を宣べ、呼延贊、単騎駕を救う
- 第七回 北漢主、議りて河東を守り、呼延贊、力めて敵将を擒にす
- 第八回 李建忠、議りて接天関を取り、大遼、兵を出して晋陽を救う
- 第九回 郭進、大いに耶律沙を破り、劉鈞、勅書もて楊業を召す
- 第十回 八王、反間の計を進献し、楊光美、使いを奉じて楊業を説く

北宋志伝 卷三

(宋太宗、雍熙四年己卯の年から、雍熙三年丙戌の年まで、凡そ七年の事を記す)

- 第十一回 小聖、夢に感じて太原を取り、太宗、議を下して大遼を征つ
- 第十二回 高懷徳、幽州にて大いに戦い、宋の太宗、師を班して汴に還る
- 第十三回 李漢瓊、智もて蕃將に勝ち、楊令公、大いに遼兵を破る
- 第十四回 将士を擒いて趙普、官を辞し、群臣に宴して宋琪、詩を賦す
- 第十五回 曹彬、兵を部いて大遼を征ち、高懷徳、岐溝関に戦死す

北宋志伝 卷四

(宋太宗、雍熙四年丁亥の年より、淳化二年辛卯の年まで、凡そ五年の事を記す)

- 第十六回 太宗、五台山に駕幸し、淵平、幽州城に戦死す
- 第十七回 宋の太宗、北番を征たんことを議し、柴夫人、楊業を保たんことを奏す
- 第十八回 呼延贊、大いに遼兵と戦い、李陵碑にて楊業、節に死す

第十九回 瓜州の營にて七郎、射に遭い、胡原の谷にて六使、救いに遇う
第二十回 六使、汴京にて御状を告げ、王欽、計を定めて八王を囚らんとす

北宋志伝 卷五

(宋太宗、至道元年乙未の年から、宋真宗、咸平二年己亥の年まで、凡そ五年の事を記す)

第二十一回 宋の名臣、官を辞し印を解き、蕭太后、中原を囚らんことを議す

第二十二回 楊家將、晋陽にて武を闘わせ、楊六郎、鎮三関を領す

第二十三回 樵夫、詭計もて孟良を捉え、六使、单騎にて焦贊を収む

第二十四回 孟良、智もて驢驪馬を盗み、岳勝、大いに蕭天右と戦う

第二十五回 五台山に孟良、兵を借り、三関寨にて五郎、象を観る

関連史実年表

訳者解説 謝辞もこめて

完
訊

楊家將演義

北宋志伝 卷六



九妹女、誤つて幽州に陥り

楊延徳、大いに番兵を破る

一方、巡視の遼兵は幽州に戻ると、丞相の張華に目通りし、知らせた。

「天馬山の庵に、一人の勇士が修行しております。まこと、弓矢に手練れ、武芸は群を抜いております。われら十数人は、近づくこともできませんでした」

これを聞いた張華は、大いに喜んだ。

「そのような者がいるならば、下知を送り招かねばならぬな」

遼兵は命令を受け、下知状を持ってまた庵へ赴くと、庵主に会つてことを伝えた。

庵主は九妹に相談した。

「幽州の張丞相が下知を送つてよこし、呼びよせにきた。そなた、行くか？」

九妹は答える。

「お招き頂いた以上、お断りなどしません」

庵主は驚き、九妹を庵の後ろに連れて行くと、言い聞かせた。

「そなたは女だ。もし見破られたら、命も危ういのだぞ。どうして行くなどと申すのだ」

「庵主様のお心遣い痛み入ります。ですが、こたび行くのは都合がよいのです。内部で事にあたれば、

兄を救う機会もあるでしょう」

「くれぐれも気をつけて行くのだぞ」

庵主は言った。

九妹はその日のうちに庵主に暇を告げ、遼の役人とともに一路幽州へむかった。張華の邸につき、見ると、張華がたずねた。

「そなたはどこの者だ？ まず姓名を申せ。用いるのは、それからだ」

「原籍は太原で、姓は胡、名は元と申します。幼少のころ、武拳のため教練を積んでいましたが、いくたび武拳を受けても受からず、そのため家を捨て庵で修行しておりました。昨日、お召しのご命令を賜りましたので、やつて参りました」

張華は、九妹の涼やかな話しぶりと、抜きんでた風貌を気に入り、ひどく喜んだ。そこで、清潔な部屋を一つ整えさせ、与えて住まわせることにした。九妹は挨拶して下がっていった。

張華は後堂に入ると、九妹を娘の月英の婿に迎えたい、と夫人に相談した。夫人が賛成したので、翌日、張華は遼の役人に命じ、九妹へ知らせをやつた。

九妹は、

「それは、ありがたいことと存じます。ただ、丞相様にお召しいただきましたが、このところ、宋の軍兵が国境におり、戦いがまだ止んでおりません。私がこれまで学んできたことを活かし、わずかながら功を立てて参りますので、その後にご婚儀をお許しください」

遼の役人が戻り張華に報告すると、張華は言った。

「あの者の武芸が、どれほどのものか。ひとまず見てみるとするか」
すぐに朝服を整え、蕭太后のもとに奏上しに向かった。

「臣のもとで武人を一人召し抱えたのですが、堂々たる英雄ぶりでございまして、太后様のために功を立てたいと申しております。どうか、この者に職をお授けください。宋軍を退かせてみせますゆえ」

これを許した蕭太后は、下命して九妹を幽州団練使に封じ、兵五千を与えて、蕭天右の援護に行かせることにした。勅旨を得た九妹は、拜命し終わると、兵を携えて張華のもとを辞去した。そしてまっすぐ澶州に向かい、蕭天右と軍を合流させ、西の陣営に駐屯した。

とその時、楊五郎が軍をせき立て戦いを挑んできた。九妹は軍装して馬にのり、陣前に走り出て、大きく叫んだ。

「宋将よ、疾く退けば、命は助けてやろう」

五郎はすぐに九妹に気がつき、驚愕した。

「そなた、なぜ敵方で兵を率いて戦っているのだ」

九妹は合図を送って言った。

「五郎兄上、負けたふりを。わたくしに計略があります」

意をくみ取った五郎は、斧をふり回し戦うと、たった数合で大敗して逃げていく。九妹は数里ほど追いかけてから、戻った。

哨戒の騎馬兵から、蕭天右の軍中に知らせが入った。

「新たに帰順した将が、宋の一軍に大勝しました」

大いに喜んだ蕭天右は、人をやって九妹を幕舎に召し入れ、宋を破る策について協議することにした。

しかし、軍営の遼兵のなかに、九妹の顔を知る者がいたのである。そつと蕭天右に耳打ちした。

「その者は先日、陣中にて六郎の首級を確認した者です。ご用心ください、閣下」
蕭天右はひどく驚き、遼の兵たちに九妹を捕らえさせた。

訳を知らない九妹は訊ねた。

「私には、宋軍を撃退した功がございます。閣下、なぜ私を捕らえるのですか」

「そなたは、そもそも宋朝の楊家の将士であろう。俺を欺こうとはな」

有無を言わず檻車に押しこむと、下士官に幽州へ護送させて、蕭太后に知らせを入れた。奏上を受けた蕭太后は、張華を呼び出してことを糾した。

「私も事実を知りませなんだ。どうか獄に下し、他の楊家の将士を捕らえましてから、一斉に首をお刎ねください」

張華が奏上すると、蕭太后はこれを許し、九妹を投獄するよう命じた。これをまさに、

謀^{はかりごと}そもそも兄のためなるに、わが身が罠に陥れり

というもの。

一方、三関にことの知らせが入った。

楊五郎は、妹が危難に陥ったと聞き、急ぎ諸將と協議した。

「六郎は、無事だということだ。だが今度は、九妹が獄に繋がれた。まずこれを救わねばならん」

「どのような妙計が」

と下士官の陳林が訊ねる。

「幽州は右手に西番せいぱんが控えており、まさに唇齒しんしの関係にある。俺が西番の軍のふりをして、救援にむかう。蕭太后は必ず信じる。内部から事を起こせば、九妹を救えるだろう」

五郎の言葉を受け、陳林は言った。

「その計略はとても良いかと。五郎様が先に行きましたら、私も軍を率いて軍路の半ばから呼応します」

そこで、五郎は手筈を整え、西番の旗印をあげて軍を引き連れていき、幽州に到着したところで、蕭太后に知らせを入れた。

蕭太后は侍臣に命じ、西番国の統兵の総大将を召し入れ謁見することにした。命を受けた楊五郎が、玉座のもとに進み、名乗り終わると、蕭太后は口を開いた。

「悪路を越えて、よくぞ参られた、將軍」

「西番国王は、太后様が宋朝と戦いくさをし、いまだ勝負がつかぬことをお思いになっております。それ故、

それがしに兵を与え、加勢に向かわせた次第にございます」

蕭太后は喜色を浮かべ、すぐさまもてなしの宴席を設け、自ら觴さかづきをとってあつく褒美を与えた。

「軍の情勢は、差し迫っております。私があす出兵し、宋軍を退けてまいるべきかと」

五郎が言うと、蕭太后は答えた。

「遠くよりまいり、疲れておろう。もう数日まってから行くがよい」

だが、五郎は宴席を辞去すると、城の南に陣営を張り、遼軍が備えをしていない隙について、今夜のうちに宮城に攻め入る、と軍中に命を下したのである。命令を得た諸軍は、各々備えをした。

この時、九妹は獄中であつた。

獄吏の章奴しょうどは、九妹が卑しからぬ人物だと知り、充分に待遇し、何度も逃がそうとしたのだが、いまだ機会を得ていなかった。

九妹は章奴に言った。

「あなたには、手厚い待遇を受けた。先ほど六王ろくじんを占つたのだが、今日この危難から脱出できるようだ。あなたとともに宋朝へ逃げるのがよい、と思つているのだが。きつと褒美があるだろう」

「ずっと、そうしたいと考えていたんです。ただ、だれも一緒に行く者がいなかったもので。將軍が俺を連れて行ってくださるなら、今夜、獄から抜け出ます」

そこで九妹は準備を整えた。

夕闇がせまってきたころ、城の南から炮の音が数回響いてきた。